

2. 杜甫詩対偶素の提唱

水谷 誠（所属なし）

唐代律詩の押韻を調べていたときに、どの詩人も特定の韻字に偏って用いていることに気づいた。こうしたことから、律詩対偶での上の句末字も表現が偏るのではないかと調べてみた。確かにこうした傾向を見ることができた。この点から、唐代詩人は律詩を作るときにある文字の組み合わせを持っていて、それを中心に作成しているのではないかと考えた。

そこで、律詩対偶の上の部分(五言なら上二字、七言なら上四字)も二字セットの組み合わせを持っているのではないか。それらを中心に出現するのではないかと考えて見た。この二字セットを「対偶素」(熟語のケースが多いが、必ずしも熟語ではない)と名付け、どのように出てくるのかを白居易について見てみた。かなり多用していることがわかった。

次に改めて、杜甫の場合、どのように出てくるのかを、考察することにした。対偶の上の部分に限らず、下の部分も考察することにした。この場合、一字が余ることになるがある程度機械的に二字と一字に分けて、一字の部分捨てて考えないことにした。さらに律詩に限らず、近体詩すべて、古体詩も調べてみることにした。古体詩の対偶はかなり難しく、多くの誤りを含んでいることを率直に認めざるを得ない。それでも、杜甫の古体詩対偶を無視して、杜甫の対偶を論じることができないのは、この調査結果を見て容易にわかるだろう。

今回、こうして「杜甫詩対偶素」のデータベースができた。ただ、寄る年波でこれらの結果を論文にするだけの力がないことがわかった。論文を書くのは力技が要る。無理に一人で頑張るよりも、これを公開して、皆さんに利用してもらうことにした。不十分な点が多いので、大いに改編してもらってかまわない。どんどん利用してもらいたい。だから、「提唱」とするゆえんである。